

歩兵第十六聯隊の雲南・ビルマ作戦

【第2部】

新発田駐屯地援護室 佐藤 和敏

昭和十九年八月以来、第二大隊は聯隊主力と離れ、印支連絡の要衝バーモ確保の任につき、酷暑、瘴癘（しょうれい・伝染性の熱病）を克服しつつ、我に十数倍しその精強を内外に誇った敵、重慶雲南遠征軍と戦った。

二月十七日、「大隊を以って自動貨車によりピンピンに急行し第三十三師団長の指揮下に入るべし」の軍命令に接し、十八日夜マダヤを出発。敵機の活動は昼夜の別なく活発を極め、我が行動は制約され、昼は木陰に潜み夜間のみ行動し、二十一日朝、ポパ山に辿りつき下車、薄暮を利用し至厳な警戒のもとにピンピンへ急行した。

昭和二十年二月二十一日夜十一時頃、オイン部落にさしかかるや斥候の報告で「戦車を主体とする敵の機甲部隊は、既にイラワジ河を渡河しオイン西方三千附近に迫りつつあり」との事を知った。

予期せざる場所で大隊は、敵機甲部隊と不期遭遇戦を展開することとなった。敵はM四戦車約七十台、突如の転進で兵要地誌の研究も出来ておらず、地図は大隊に十万分の一が一部あるのみで、唯々イラワジ河の線に向かい邁進あるのみ的大隊であった。

第五中隊は直ちに肉攻（※「肉薄攻撃班」の略称）の準備にとりかかり、大隊はオイン部落を占領し、敵の南下を阻止するに決した。午前四時頃までに、時間の余裕なく肉攻班を主として陣地を編成する一刻を争う陣地占領である。将兵はバーモの歴戦者であり、愕くほど早く工事は出来上がり、数時間で各種掩体は完成した。之は我が将兵が平地で戦車との不利な戦闘を予期した覚悟の奮闘によるものと思われた。

黎明「ゴー」「ゴー」たる爆音と共に数十メートルも砂塵を巻上げ、続々と我に近づいてきた。前方肉攻班の附近に早くも敵戦車砲の砲声が始まった。遮蔽物として道路両側所々残る枯れ草あるのみで、一面乾燥した平坦地である。次の瞬間「グワン」「グワン」と敵戦車砲が正面に激しく土砂を吹きあげ、その煙は濛々として人影は勿論、戦車の巨体も煙に消され、只々砲銃声との間断にエンジン音が聞こえるだけである。

之は我が肉攻班の体当り攻撃に対する敵の一斉射撃である。第五中隊は敵戦車を攔坐炎上させ、緒戦に於いて一大鉄槌を下した。

この為、其の後方戦車群は中央を避け左右に展開し迂回、我が陣地を包囲する態勢をとりつつ迫ってきた。その数五～六十台、其の中の勇敢な戦車は我が陣地に侵入せんとした。

第一線肉攻班は今ぞとばかり勇躍し、よく戦車の行動を見極めつつ次々と肉攻を敢行し壮絶な戦闘が続いた。特に第六中隊正面に接近した戦車に対し、同中隊の肉攻班長、細野忠は十キロ爆弾を抱いて弾雨の中を突進し、我が身諸共履帯部に狙い違わず投入、大音響と共に戦車を炎上爆破し、自分は一つの肉片をも止めず其の英魂は遂に昇天した。これぞ真に尊き犠牲的精神の発露であり、又皇軍の華たる勇士である。洵に武人の亀鑑（かがみの意）と謂うべきであった。

この様な状態が第七中隊、機関銃、歩兵砲小隊の方向にも展開し、戦況は益々惨烈を加えていった。我が歩兵砲、機関銃は瞬時に敵戦車砲の為破壊され、残る小銃、軽機関銃で戦車の展望孔、銃眼を狙撃するにとどまり、遂には只々敵の行動を監視する程度となった。敵戦車は狙撃を避け、陣前百メートル位に戦車を横向けに停め、メクラ撃ちに砲弾を浴びせて来た。

九時頃敵機数機飛来し、我が陣地を銃撃すると共に焼夷弾を投下し、ニッパ葺きの屋根に火がつき、竹の柱は勢いよく燃え上った。敵は我が兵の陣地から逃げるのを待っているが如く、全火力を集中して窮まっている。敵は接近すれば肉攻の餌食となるを避けるという格好であった。

大隊は早朝から部落を包囲した六～七十台の戦車と、阿修羅の如き戦闘を繰り返した。

いつしか太陽も西に傾き、椰子の葉の下より西日が差込んできた。敵は包囲を解き一台二台とオイン部落南側に集結を開始した。

夜陰に乗り肉攻を以って殲滅するに決し準備をしたが、敵は夜襲を恐れ遠く南下した。

大隊は一部肉攻班を之に充て、主力は直に戦場掃除をなし部隊の掌握に努め、夜襲に乗じて弓兵团主力方面に前進すべく決した。

【タリンゴン奪回後の聯隊主力の戦闘】

二月二十六日、第一大隊正面の敵は総反撃を行って来た。タリンゴン奪回後、敵の主攻撃となったものの如く敵兵力激増し、戦車二十数両、歩兵六～七百を基幹として、空陸呼応し怒濤の如く殺到して来た。

大隊は、将兵よく之を所在に邀撃、撃攘し忠勇なる我が肉攻班も、又能く勇敢なる斬込隊と協力し、戦車撃滅に数昼夜を費やした。

又、大隊砲小隊は対戦車砲として第一線に進出、十榴小隊（一門）と挙止一体となり対戦車差違戦法に出て、敵戦車と鏑を削る粉戦敢闘に終始し、戦車を攔控炎上させた。

死闘すること三昼夜に亘り、戦車は八両、兵員の殺傷約三百有余に上る戦果をあげたが我が損傷も続出し、遂に力尽き刀折れるの状態となったが、我が将兵不眠不休の奮闘により、敵の攻撃を再三再四之を撃退し、約一週間に亘り陣地を死守した。

三月九日夜、軍全般の状況により、マンダレー街道方面に転用を命ぜられミヨサ方面に機動を開始した。

【チェサイン附近の集結及びギョウ附近の戦闘】

三月十三日、チェサイン（ミヨサ西方六キロ）附近に集結するや、列兵団のマンダレー南方地区の転戦に伴う翼側援護の為、ギョウに向かい攻撃前進した。当時、弓兵団はミンジャン西北方地区に於ける兵力の集結に努めていて、青葉兵団は師団の前進部隊として、独力で進撃した。

聯隊は進撃に先だち十日夜、八塩少尉の指揮する菖蒲斬込隊をギョウに挺進せしめ、主力の攻撃に策応させた。

ギョウ南方約四キロ、クドウ河の合流地点南岸に攻撃を準備し、敵の牽制、抑留を図った。之が為第一線部隊より選抜した挺進斬込隊を潜入させ、八塩斬込隊の行動を促進した。

翌十四日十時三十分、戦車七十両を伴う約百五十の敵は、我が第一線に対し来攻した。各大隊は、隠忍よく陣地前至近距離に敵を引き付け、一挙に急襲的火力を浴びせ之を撃滅に努めたが、肉攻資材なく火砲弾薬も数発の少量を有するのみの状況であり、敵は我が翼側、背後、間隙に浸透し、本部、司令部すら敵戦車と交戦するに至った。

井之上兵団長以下、軍刀を引寄せ手榴弾を投げ、正に将兵一体となり陣地を固守し、肉弾必殺、戦車刺違いの死闘粉戦を展開し、交戦十時間余之を撃退し、敵戦車の蹂躪を未然に排撃することを得た。

着々戦果をあげている八塩斬込隊を依然敵中に潜入させたまま、聯隊は十五日未明、兵を徹しチェサインに集結した。同斬込隊は戦機を捕捉し、戦車三両、トラック六両を爆破炎上させるの大戦果を挙げた。

【ナトギ地区の戦闘及び敵中突破】

青葉兵団は師団の陣地占領援護の任務を達成し、三月十六日、ナトギ北方地区に転進し

爾後の攻撃を準備した。

三月中旬、有力な敵機甲兵団はマンダレー街道の要衝ミッタに侵入し、我が現地守備隊は之と交戦中との情報に接し、兵団はミッタに急進を命ぜられ、二十日より行動を発起し東進中、南下中の一部の敵機甲部隊は、ナトギ・ミッタ本道の要点ピンジーに進出占拠した為、聯隊は主力を以って之を攻撃した。

清水少尉の指揮する斬込隊は、既にピンジーに肉薄し着々と戦果を収めていた。この成果を拡張し、敵を一挙に撃滅する必殺必滅の準備を実施中、師団命令によりナトギ西方地区に対し急遽反転することとなった。

聯隊は二十四日夜、転進行動を起こし、ピンジー攻撃の為派遣した警戒部隊等を掌握する余裕なく、ミンジャン方向の戦況に即応すべく急進、但し清水隊を依然残置し前任務を続行させた。

敵はイラワジ河渡河部隊に策応し、有力な空挺部隊を我が軍後方の要衝たるメーカーラー飛行場に降下させ、後方補給の遮断をはかり、敵地上軍はマンダレー街道上の各交通の要点を占拠するに至った。

軍はメーカーラー以北、マンダレー街道以東の地区に戦線を整理することとなり、転進援護の為、青葉兵団はその後衛を命ぜられ、連隊は更に師団主力の転進援護の任を受け、三月三十日所命の態勢に部隊を配備した。

師団が転進を開始するや、驕敵は勢いに乗り南下突進、翌三十一日より我が警戒部隊との間に壮烈なる遭遇戦を惹起し、奮戦激闘数昼夜に亘り展開した。

聯隊は名誉にかけて、任務の完遂を期し師団の機動を援護し、来るべき突破作戦の準備を促進した。

四月三日、聯隊は兵団の後衛となり、転進を発揮し敵中を突破前進、六日最後の敵線たるマンダレー街道を突破し、七日、師団主力に追及した。

兵団長井之上大佐は、突破の途次、一部の敵と遭遇交戦した際、戦闘指揮中、不幸負傷（重傷）した。弓兵団はトングー方面の戦況に即応する為転進を要する状況であったが、優勢な敵機甲部隊によって転進の要点は悉く扼止せられ、進路の変更を要すると共に、敵の突進を排撃中にて、聯隊は直ちに師団主力の側背援護及び列兵団転進の間、陣地の確保を命ぜられ、ゴンユウ、スパン、ミンヤカン附近に拠点陣地を占領し、敵の突進の撃破に努めた。

この時に於ける聯隊の戦力は約三分の一以下に低下し、第一線兵力は約三百有余、弾薬資材は、突破時携行したものの外補充せられず、加えて患者約三十名を擁し、糧秣の補給もなく、飲料水の缺乏を告げ、言語を絶する艱難辛苦を克服し、障碍を排撃し、敵撃滅の闘魂に燃え至難な任務の完遂に万全を期した

四月八日朝、敵は戦車七～八両、歩兵数百よりなる兵力を以って来攻した。

敵は当初、左第一線を衝いたが堅固にて抜けないのを知り、右側背より包囲する如く侵攻して来た。右第一線の右翼には第一大隊砲小隊があり、砲は弾薬を射耗し尽くし自衛火器（軽機一挺、小銃十三挺）を以って臨時歩兵小隊となり、鶴間少尉が之を指揮。敵戦車現るや、同小隊は陣前三～四十メートルに引きつけ好機に乘じ突如熾烈な火力を急襲して攻撃した。敵は狼狽し、一目散に敗走し戦車二両を鹵獲し、遺棄死体十数名を算する戦果をあげた。

翌日、右第一線正面に来攻した敵に対しても之を撃退し、陣地を確保していたが、十日我が背後を攻撃され、これを撃擯する兵力充分ならず、遂にゴンユウ部落に侵入された。

右第一線隊長中山中尉は、機を逸せず斬込隊を率いこれを撃滅し、重、軽機関銃数挺を鹵獲、装甲車一両を炎上させ陣地を固守した。

翌十一日、転進の命が下り、聯隊は敵を撃擯しつつ第一線兵力の集結を計り、十二日夜行動を起こし、カロー街道上ラインダットに先行すべく努めたが、師団の急激な要求に即応すること能わず、十二日夜、先遣の任をとかれ、師団主力に先んじ該地に急進せよとの電命により、勇断数千フィートの高地を横断急進するに決し、軍旗を捧持し、兵団長 井之上大佐以下約五十名の患者を同行し突破前進した。

各隊、一週間の糧秣を携行し、兵器、装具を負い井之上大佐以下の担送患者を担い一つ水なき奇岩、険峻を攀じ上り急坂を下りつつ行程約百五十キロメートルを三縦隊となって強行軍した。

聯隊砲四門、弾薬二十発を鉄石の団結の下協力一致、完全装具のまま搬送によって、遂に突破に成功した。最後の二日間は糧食も尽き果て、バナナを食いつつの行軍であった。

第二十七代聯隊長、井之上大佐は、ここビルマに於いて戦死された。

四月十七日、カロー街道上ピンヤンに集結。二十日、聯隊は師団の先遣隊となり、トングーに進出すべく山地道を迂回転進した。カロー南方約百五十キロ、ペコンを第一前進目標とし、三梯隊に区分し青葉兵団及び直轄部隊を編合し、敵の常時制空権下に終始する中を夜行軍を以って一路目的地に向かって急進した。

気候は愈々雨季に入り、降雨は時に豪雨と化し、部隊の行軍を妨害すること甚だしく、靴傷患者が続出、マラリヤの熱発及び下痢患者も増発し、部隊の行軍速度は、為に阻害されることが少なくなかった。

五月二日ペコンに到着。ペコンから二百八十キロの行程をパプンに向かい前進、近傍の部落及び山道の鞍部等には、土匪出没し、叛乱ビルマ国軍の盤居蠢動も見られた。

聯隊は、我が前進を妨害する敵を撃退しつつ、連日連夜、豪雨と戦い或いは羊腸曲折の急峻な山道を進み或いは断崖、奇岩連続する悪路を冒し、時には溪谷のジャングルを啓開しつつ渡り、河床道を前進する等、一日の行程数キロに満たぬこともあった。

五月下旬、弓兵団の配属を解かれ、軍直轄となり、ピリン附近に於ける警備を担当した。

(新発田聯隊史より)